

山梨県北巨摩郡大泉村

甲 ッ 原 遺 跡 概 報 II

(第4次調査)

一般県道須玉八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査



1993. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

甲ッ原遺跡は、八ヶ岳南麓の山梨県北巨摩郡大泉村に所在し、北には八ヶ岳が聳え、南には富士山を遠望することができる風光明媚な所に位置しております。

本遺跡の発掘調査は、一般県道須玉八ヶ岳公園線建設工事に伴い、1989年度から1992年度まで4次に亘って実施され、来年度以降も継続予定であります。今年度の第4次調査では、縄文時代前期後半から中期後半にかけての住居址27軒と土坑約140基が発見されています。また1軒ではありますが平安時代の住居址も発見されております。調査区のうち、南半分は昨年度の調査成果と合わせて中央に広場の空間を有する縄文時代前期から中期中葉にかけての環状集落を形成すると推定されております。

一方、遺物に関しては縄文時代中期初頭のものと思われる2基の土坑から縄文時代のものとしては県内3例目の琥珀製首飾りが数点出土しており、当時の交易の様相を知る手がかりとして注目されております。また土坑から出土した縄文時代中期中葉の特殊な台を有する鉢形土器は、赤色および黒色の塗彩が施された祭祀的色彩の強い土器であります。

本遺跡の発掘調査は長期に亘るため、1992年3月に第1次調査から第3次調査までの概要を『甲ッ原遺跡概報Ⅰ』として刊行致しました。本書はこれに続く『発掘調査概報Ⅱ』として今年度実施した第4次調査の概要をまとめたものであります。本書が研究の一助となれば幸甚であります。

末筆ながら、種々ご指導・ご協力を賜った関係各位、並びに直接調査に参加された方々に厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

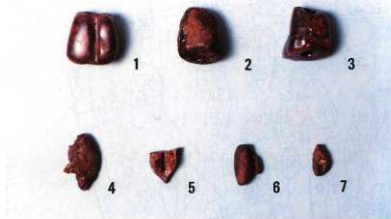
所長 磯貝正義

目次

1. 遺跡をとりまく環境
2. 調査経過
3. 第4次調査の概要
4. 縄文時代の住居址と遺物
【C区の集落について】
5. 縄文時代の土坑と遺物
【琥珀製首飾について】
6. 平安時代の住居址と遺物

例言

1. 本書は、1992年度に実施した山梨県北巨摩郡大泉村に所在する甲ッ原（かぶつっぱら）遺跡の発掘調査（第4次調査）の概報である。
2. 調査は、一般県道須玉八ヶ岳公園線建設事業に伴って山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は山梨県埋蔵文化財センターの山本茂樹・五味信吾が担当した。
4. 本書の執筆・編集は山本・五味が行い、文責については文末に明記した。
5. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 発掘調査および本書作成に当たり、下記の方々からご教示・ご協力を得た。記して謝意を表する次第である。（敬称略）
伊藤公明・高森良文・赤沢英男・平川南・山口英男・大鷹依子・河西学・佐野勝広・杉本充・桜井真貴



PL 1 250号土坑(2~7) 302号土坑(1) 出土琥珀製品(1/2)



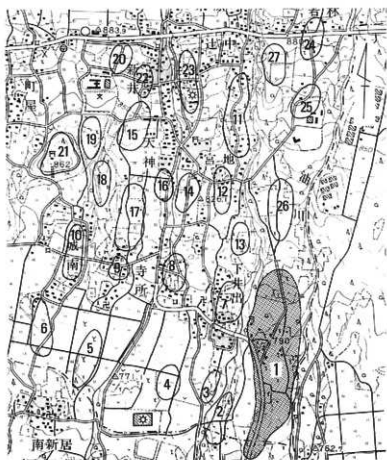
PL 2 250号土坑琥珀製垂飾(3)出土状況



PL 3 248号土坑出土特殊脚付鉢



PL 4 248号土坑土器出土状況



1. 甲ッ原
2. 和田第2
3. 甲ッ
4. 原田
5. 寺所
6. 金生
7. 下井出
8. 清水
9. 寺所墓址
10. 城下
11. 宮地第1
12. 宮地第2
13. 宮地第3
14. 宮地第4
15. 天神A・B
16. 天神C
17. 山崎第1
18. 山崎第2
19. 城上第1
20. 城上第2
21. 谷戸城址
22. 新井
23. 辻
24. 古林第1
25. 古林第2
26. 古林第3
27. 古林第4

第1図 甲ッ原遺跡と周辺の遺跡 (1/20,000)

0 500m

1. 遺跡をとりまく環境

甲ッ原遺跡は八ヶ岳の南麓に位置しており、油川と甲川に挟まれた南へ緩く伸びる舌状台地に立地する。本遺跡の標高は778mから810mを測る。

甲ッ原遺跡の周辺には数多くの遺跡が分布しているが(第1図)、とりわけ縄文時代と平安時代から中世の遺跡が濃密に認められる。

周辺の遺跡で縄文時代前期の住居址が確認されているのは、天神C遺跡・寺所遺跡・和田第2遺跡・原田遺跡・下井出遺跡・古林第3遺跡等である。また縄文時代中期では寺所遺跡・宮地第2・第3遺跡が調査されており、最近では甲ッ原遺跡の北に位置する古林第4遺跡の発掘調査がなされ、縄文時代中期中葉の住居址内からヒスイ製の笛が出土し関係者を驚かせた。甲ッ原遺跡の西方には縄文時代後・晩期の金生遺跡が存在し、昭和58年に国の史跡に指定されている。

平安時代の遺跡としては寺所遺跡で31軒の住居址が調査されているのをはじめ、原田遺跡では3軒、城下遺跡では20軒、宮地第2遺跡では3軒の住居址が確認されている。(山本茂樹)

引用・参考文献

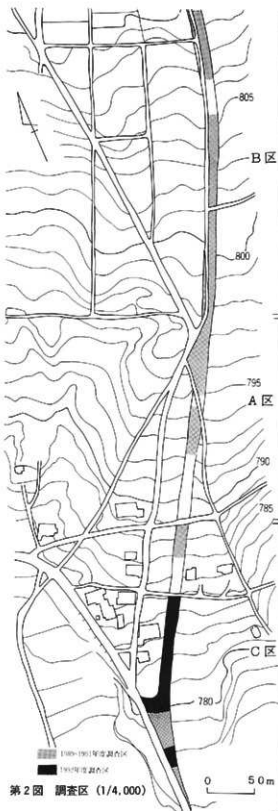
- 伊藤公明 1992 『古林第4遺跡』『山梨考古』第42号
 大泉村教育委員会 1991 『宮地第2遺跡・宮地第3遺跡』
 山梨県教育委員会 1987 『寺所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
 山梨県教育委員会 1992 『甲ヶ原遺跡概報Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第71集
 山梨県教育委員会 1989 『金生遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集

2. 調査経過

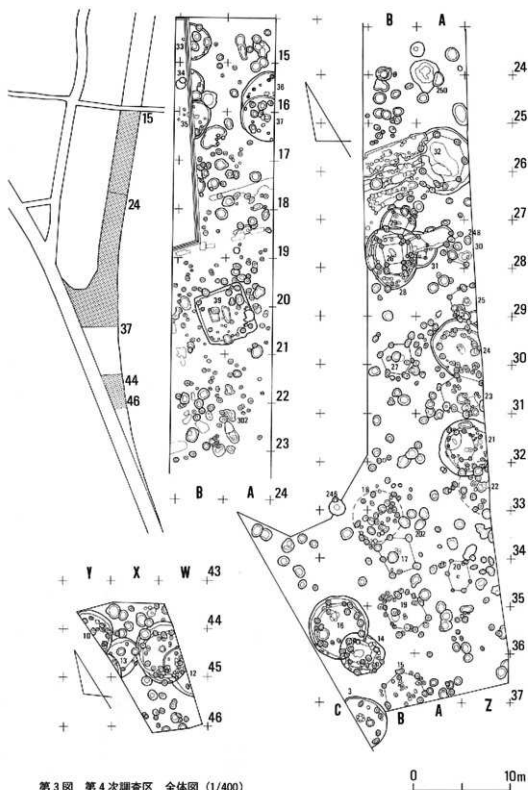
一般県道須玉八ヶ岳公園線建設に伴い、1989年度から1991年度まで実施された調査区域はA・B区およびC区で、調査面積4,700㎡までが終了し、残りの部分については引き続き調査が行われている（第2図）。

これまでの調査結果よりA区からC区にかけて最も遺構が集中し、縄文時代前期から中期にかけて住居址が45軒、土坑300基以上検出されている。特にA区では、前期の諸磯b期に集落を形成し、その後空白期間をむかえ五領ヶ台期に1軒住居址が認められる。そして暫くの空白期間を有し、井戸尻期に再び集落が構成され、そのまま継続しながら曾利Ⅲ期で集落が最大となり、環状の集落を呈するものと推定される。その後A区では集落の形成が見られなくなる。

B区では藤内期の集落が形成されるが、継続することはなく消滅する。（山本茂樹）



第2図 調査区 (1/4,000)



第3図 第4次調査区 全体図 (1/400)

3. 第4次調査の概要

1992年度の調査対象地区は、一般県道須玉八ヶ岳公園線建設予定地の南端の三叉路部分から、約120m北へ上った地区でこれをC区とし、その調査面積は1715㎡である（第3図）。

1992年度の発掘調査の結果確認された遺構は、縄文時代前期から中期までの住居址27軒、土坑約140基及び平安時代の住居址1軒である。縄文時代の遺物は前期諸磯期から中期末葉の曾利V期まで認められるが、特に諸磯c期・藤内期・井戸尻期の出土量は豊富であり、C区を中心となる時期である。なおこれらの各時期については、環状集落の様相を示しているものと想定される。

また、A・B-18グリッドからA・B-25グリッドまでの間に縄文時代の住居址は存在しておらず、平安時代の住居址1軒のみが確認されている。（山本茂樹）

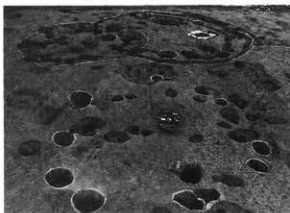
4. 縄文時代の住居址と遺物

9号住居址（PL-5）W・X-45グリッドに位置する。3軒の重複関係が認められる。形態は円形を呈する。規模は直径6.00mを計測する。周溝は入口部と考えられる南東の1ヶ所を除けばほぼ全周すると思われる。溝の深さは2.5cmから17cmである。壁の高さは北側で25cm、西側で17cm、南側で1.5cmをそれぞれ測る。炉は住居址のほぼ中央に位置する円形石囲炉で、長径をほぼ南北にもつ。その周りの床はよく踏み固められている。時期は井戸尻期と考えられる。



PL 5 9号住居址

16号住居址（PL-6）C-36グリッドに位置し、14号住居址と重複関係にあり、本住居址の方が新しい。また本住居址は、同心円状に周溝が存在していることから、拡張が行われたものと考えられる。形態は多角形を呈する住居址と思われる。規模は長径6.70m、短径6.50mをそれぞれ有する。周溝は、入口部と考えられる南側では、14号住居址と重複関係のため認められない。壁の高さは北側で23.5cm、西側で7.6cm、



PL 6 14・16・19号住居址

東側で5.0mをそれぞれ測る。炉は住居址の北側に片寄って方形石囲炉が設置され、大形の石を4枚、平坦面を上に向けてつくられている。主柱穴はそれぞれのコーナー部に設置され、7本確認される。時期は井戸尻期である。

26号住居址(PL-7) B-28グリッドに位置する。4軒の重複関係が認められ、本住居址が一番新しい。形態はほぼ円形を呈する。規模は直径4.40mを測る。周溝は2ヶ所途切れるほかは全周する。深さは7.3cmから12cmを測る。炉は住居址のほぼ中央に石囲炉を設置する。主柱穴は4本確認される。炉の北側には貯蔵穴と思われる袋状の土坑が1基存在している。時期は藤内期である。

29号住居址(PL-7) B-27・28グリッドに位置し、26号住居址に切られた南側部分は明確ではないが、北側部分の残存状態は良好である。形態は円形を呈し、規模は直径3.70mである。壁の高さは20cmから34cmを測る。炉は住居址のほぼ中央に位置し、土器を埋設する。主柱穴は4本が確認される。時期は炉体土器から貉沢期に属する。

32号住居址(PL-9) A-26グリッドに位置している。形態は円形若しくは多角形を呈すると思われる。規模は南北方向で7.20mを測る。周溝は全周するものと思われ、深さは6cmから8.7cmを測る。炉は残存していない。主柱穴は7本確認される。住居址の南側に埋甕が存在していることから、入口部は南側と考えられ、埋甕より住居の時期は曾利Ⅱ期である。

36号住居址(PL-10) A-15グリッドに位置する。住居址の約半分は調査区外へ伸びている。形態はほぼ円形を呈すると思われる。規模は残存部分で直径6mを測る。確認面か



PL 7 26・28・29・31号住居址



PL 8 26号住居址遺物出土状況



PL 9 32号住居址



PL10 36・37号住居址

ら床面までの高さは、北側で30cm、西側で16cmである。炉は住居址の中央よりやや北側に長方形の石囲炉が設置される。また本住居址の炉の西側に石囲炉より古いと思われる炉跡が、5個の礫で形成されている。周溝は北壁で一部認められる。床面の南側では貼り床となる。時期は藤内期に属する。

37号住居址(PL-10) A-16グリッドに位置する。36号住居址と重複関係にある。住居址の約半分は調査区外である。形態はほぼ円形を呈するものと思われる。規模は直径4.80mを測る。壁の高さは北側では36号住居址と重複関係によって削られているため、2cmから3cmが残存する。また西側では20cm、南側では1cmをそれぞれ測る。住居址のほぼ中央で同時使用されたものと思われる炉体土器が2個体南北に並んで認められる。埋燬炉周辺の床面もよく焼けており、炉の周囲の床面は北側より南側で広くよく焼けている。周溝は確認されない。時期は炉体土器から五領ヶ台期に属し、重複する36号住居址より古いことがわかる。(山本茂樹)

住居址出土遺物(第4図) 1と2は9号住居址の出土遺物である。1は口縁部に1対の突起を有し、突起から下方向に隆帯を垂下させ、口縁部の屈曲したところで逆J字状を構成する。口唇部および隆帯に爪形文を施す。またJ字状の中心は指の腹で押し潰される。胴部は横位の沈線から底部の屈曲する箇所まで縄文が施される。内面はやや雑に磨かれ、外面の方が丁寧である。内外面の一部にはお焦げや煤の付着が認められる。2は口縁部に4単位の眼鏡状の突起を有する。胴部中位には隆帯によって横円区画を4単位施し、隆帯には刻みをつける。区画内には沈線によって隆帯を表現した波状文様を施し、波状の両側に刻みをつける。胴下半部から底部にかけて縄文が施される。これらの遺物は井戸尻式でも古式に属すると思われる。

3は15号住居址の炉およびその周辺からの出土遺物である。口縁部には一条の沈線をめぐらす。その下には沈線によるコの字状の区画を有し、区画内には縄文が施される。この土器は曾利V式に属すると思われる。

4は14号住居址内出土で、口縁部から胴下半部の約3分の1が現存する。口縁部は丸みもち内弯し、頸部には2条の粘土紐横線を施し、上部文様帯と下部文様帯とを区分する。上部文様帯は刻みが施された粘土紐隆線によって、幅広い横帯区画となり、方形区画内は半截竹管による縦位の沈線を施す。下部文様帯は縦への区画で構成される。胴上部では渦巻文と波状の沈線で区画内を埋め、胴下部では斜行沈線で埋める。藤内式に属するものである。

5と6は26号住居址の出土遺物である。5は口唇部に3単位の山形突起と、1単位の貫通孔をもつ4ヶ所の把手がつけられる。土器は隆線によって4段の横帯に区画され、最上段の口縁部文様帯は横方向の波状に粘土紐が貼り付けられ、その両側にキャタピラ文が施文され、空間には沈線や鋸歯状文が施文される。2、4段目は縦の沈線のみによって充填した区画である。3段目は粘土紐によって三角形に区切られ、その線の両側にはキャタピラ文、また空間には沈線文が施される。内面は丁寧に磨かれる。6は口縁部から胴上半部を半分欠損するが、4単位の波状口縁を呈すると思われる。口縁部から胴部にかけては隆帯をU字状に貼り付けて区画をなす。また区画内には半截竹管による平行沈線文をつけ、隆帯を意識した沈線の施文とナデが行われている。底



第4圖 住居址出土遺物 (1/6)

部は屈曲を呈する。内面はやや粗雑な仕上げとなっている。これらは藤内式に属すると思われる。

7は29号住居址の炉体土器で口縁部から胴部まで残存する。口縁部はやや開き、口縁部直下には隆帯による楕円区画文が4単位で横帯し、隆帯の脇には半載竹管状工具による押し引きがなされる。同様の手法で楕円区画の中にも施される。2段目は楕円区画を半分横へずらして4単位で横帯区画し、2段目の下から4単位の隆線がクランク状に垂下する。貉沢式に属する。

8は30号住居址の出土遺物である。口縁部は約半分、頸部までは約3分の1現存する。口縁部は丸みをもって内弯し突起を有する。突起の上面には玉抱き三叉文が施される。口縁部文様帯は隆帯によって区画され、区画内は三叉文及び沈線による渦巻文が施される。また隆帯には刻みが施文される。上部文様帯の下部から頸部にかけては、無文帯となる。井戸尻式に属する。

9は32号住居址の埋甕である。底部は穿孔され、正位に埋められる。口縁部は朝顔状に開き、口唇部には棒状工具による沈線がめぐらされる。頸部には横位の粘土紐による波状の貼り付けが施され垂下する粘土紐は、波状・渦巻状・線状の3構成で貼り付けされる。頸部から底部にかけては縄文が施される。曾利Ⅱ式に属する。

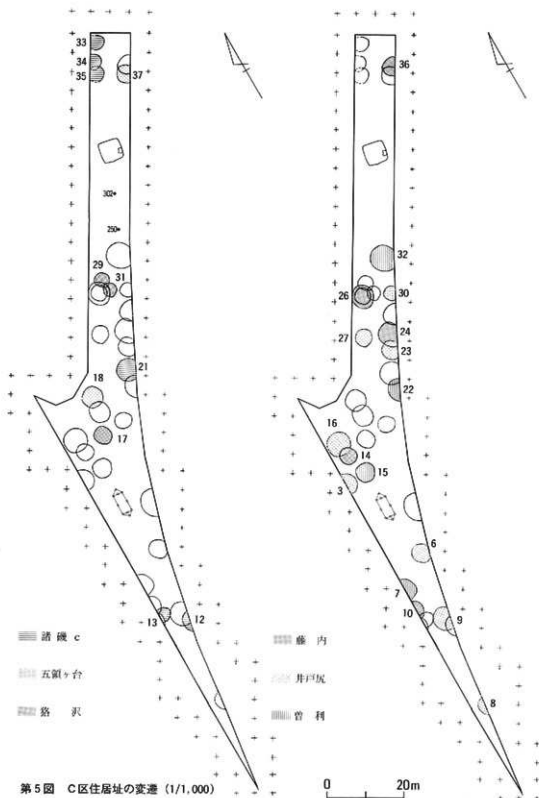
10は36号住居址のほぼ床直の出土である。口縁部はやや内弯する円筒形の深鉢で、口唇部には2箇所把手がつけられ、1つは大形のラッパ状のものと、もう1つは小形のものである。大形のラッパ状把手の横面には、半載竹管による直線と渦巻きが施される。口唇部文様帯の下は無文帯を形成する。無文帯から下は再び文様を構成し、2個1単位とする小突起と1個1単位とする小突起がそれぞれ1対付される。また突起部から垂下する隆帯は、爪形文が施され底部まで伸ばされる。胴部には、隆帯によって区画された内部を半載竹管による区画文とヘラ状工具等による三叉文と斜行沈線文で満たされる。藤内式に属する。

11と12は37号住居址の炉体土器である。11は南側の炉体土器で、口縁部を欠損する。文様構成は4単位の区画を縦位と横位の沈線で行われ、区画内はT字状の沈線で埋められる。また区画内の左にはそれぞれ渦巻状の沈線が施文され、その後、残存している器面全体に縄文が施される。12は北側の炉体土器で、口縁部と底部を欠損する。胴上部には一条の隆帯が付され、1対の逆三角形が構成される。逆三角形の頂点から垂下した隆帯は、胴中央付近でクランク状となる。その後沈線は隆帯に沿って施される。五領ケ台式に属する。 (山本茂樹)

【C区の集落について】

これまでの調査で明らかになったのは、C区において前期諸磯c期に集落が構成され、その後中期中葉に大規模な集落がつけられ、中期の後半には衰退の一途をたどることである。説明の都合上、C区を北部・中央部・南部と3ヶ所にわけて進めていくことにする。

まず諸磯c期では、住居址が調査区の北部で3軒、中央部で1軒、南部で2軒と3ヶ所に点在し、それぞれの間では該期の住居址は認められてはいない。またこの時期の土坑は、住居址に近接してつくられている。中期初頭の五領ケ台期は2軒が確認され、北部と中央部にそれぞれ1軒ずつ確認される。土坑の配置については住居址に近接してつくられるもの、住居址間の中央に位置するものが認められる。特に中央につくられた土坑からは、琥珀製の玉が出土し祭祀的な行為



がとられていたことがうかがえる。貉沢期では、ほぼ中央部に集落を形成し3軒が確認され、北部では住居址が認められてはいない。

中期中葉の藤内・井戸尻期となると住居址は、中央部から南部にかけて軒数が多く認められ密度も濃く、集落の安定期の様相を呈する。また中央部から離れて北部では、藤内期の住居が1軒存在している。土坑の分布については、中央部及び北部の住居址に近接して配置される。

曾利期になると住居址は中央部に構築されるが、住居址軒数は極端に減少する。曾利Ⅰの住居址は7・22号住の2軒、曾利Ⅱの住居址は32号住の1軒が認められ、その後空白となり曾利Ⅴの15号住が1軒認められ、これを最後に縄文時代は終焉となり、平安時代となって再び遺構および遺物が確認されるようになる。

調査区では、南へ緩やかな傾斜をもつ舌状台地に集落が存在し、現道を挟んだ西側には谷が形成される。また調査区の東側約60mでは、田畑による段が数段にわたって南に広がりをもち、谷部を形成するような地形をなしているが、当時の地形は緩やかな傾斜をもっていたものと思われる。また遺物の散布状況が調査区の東約100mまでの広がりでも確認されることから、大規模な集落が形成されていたことが予想される。

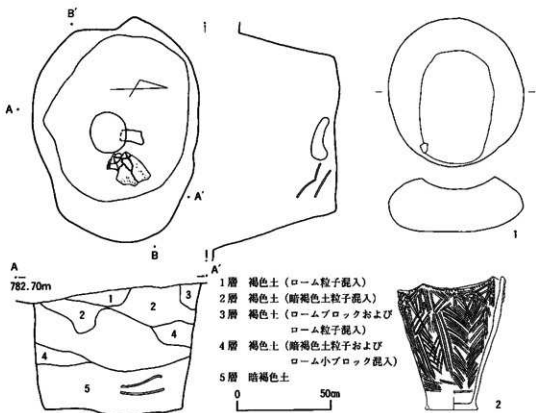
次に1991年度の調査区のA区とC区を比較してみた場合、A区では前期諸磯b期が形成されるが、C区では該期の住居址は確認されていない。また諸磯c期については、A区では発見されておらず、C区において集落が展開される。次に藤内期であるが、A区において住居址は確認されておらず、C区では該期の住居址が認められ、集落の形成を見ることができる。井戸尻期では、A区及びC区で住居址が確認される。曾利期になるとA区では、住居址の軒数が集中し集落の展開が認められる。一方C区では、この時期になると住居址軒数が極端に減少していくなかで、集落が形成されていくものの、やがては衰退していくようである。このようにA区とC区とは、井戸尻期を除いた他の時期については、集落の構成に異なった様相を示しているといえる。

(山本茂樹)

5. 縄文時代の土坑と遺物

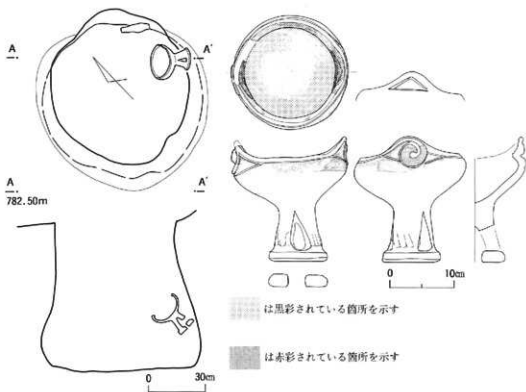
202号土坑(第6図) A-34グリッドに位置する。形態は確認面で楕円形を呈し、坑底は楕円形で平坦である。規模は長径で111.2cm、短径で87cm、深さは65cmを測る。壁はほぼ垂直の立ち上がりを示す。土層の堆積状態は斜面の下方向から流れ込んだような状況を呈しており、全体的に人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。このことにより、墓坑的な性格を持った土坑と思われる。第5層は厚い堆積を示し、この層中から土器と石皿が出土し、石皿の下に礫が存在する。土器はほぼ完形品で坑底付近に口縁部を上に向けた斜位で出土し、石皿は土器と同じ高さで皿部を下に向けて出土し完形品である。

出土遺物は石皿と土器である。1は石皿で皿部は滑らかでよく使用されている。2は4単位の波状口縁を呈し、口唇部には半截竹管による刺突が施される。器面全体には縦位と斜位に沈線が施され、その後結節状浮線文が口縁部付近に貼り付けられる。諸磯c式に比定される。



第6図 202号土坑 (1/20) および出土遺物 (1/6)

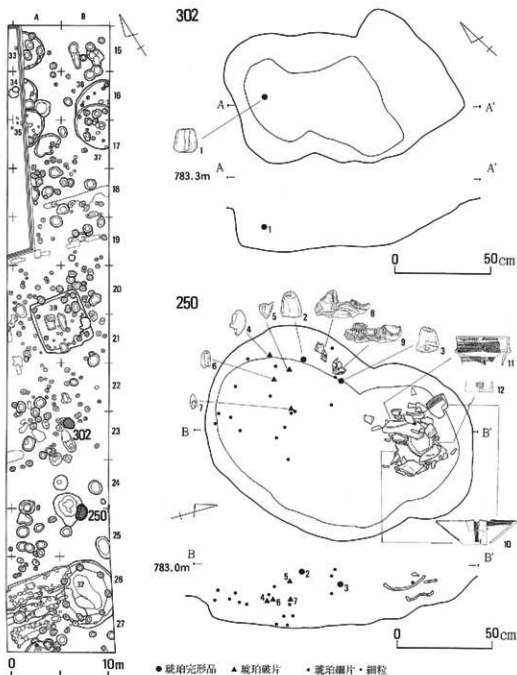
248号土坑 (第7図) Z-28グリッドに位置する。形態はほぼ円形を呈する袋状である。長径は82cm、短径は73cm、深さは78cmを測る。壁は坑底から中位までは袋状を呈し、上部はほぼ垂直に立ち上がる。坑底は平坦である。遺物は特殊脚付鉢と石斧が出土している。特殊脚付鉢は土坑の東壁寄りの坑底から16cm上の位置で発見され、口縁部を上にして斜めになった状態で出土している。土器の口縁部には2ヶ所の突起がつけられ、外面には肉厚の渦巻文をつけ、その周辺を沈線で囲み、三叉文が施される。突起の内面は三角形の影り込みがなされ、その外枠を沈線で囲む。脚部には3ヶ所の三角形の透かしが認められ、透かしの底辺はそれぞれ丸みをおびている。透かしと透かしの間には、へら状工具による調整が認められる。外面の赤彩は突起部では明瞭に認められるが、鉢の丸みをもってやや下がった箇所では、一部分に赤彩の残存が認められるものの明瞭ではない。脚部については赤彩は認められない。内面の赤彩は口唇部で認められる。外面の黒彩は赤彩が施された口唇部と鉢の底面全体に認められる。この黒彩された部分は赤彩を施すための前段階に行われている。突起までの器高は19.5cm、口径は18.6cm、脚底部径は9cmを測る。器面全体は丁寧に磨かれる。この特殊な土器は井戸尻式に比定される。(山本茂樹)



第7図 248号土坑 (1/20) および出土遺物 (1/6)

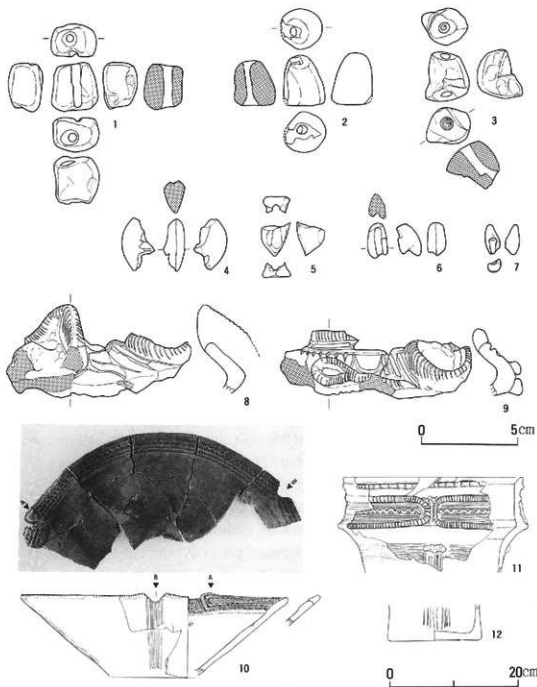
250号土坑 (第8・9図) 南北約140cm、東西約105cm、深さ約35cmの浅い土坑である。この土坑からは琥珀製品や破片が出土しており、このうち垂飾の完形品が2点 (PL-1第9図2・3)、孔の認められる破片や形状がある程度推定できる破片が4点存在し (PL-1第9図4・5・6・7)、風化が著しく本来の形状を復元することが困難な細片や細粒は17ヶ所で認められている。これらの琥珀は半透明で赤味を帯びた餗色を呈する。琥珀製品のうち、2は分銅形の垂飾で孔が縦に貫通する。側面は丸味を持ち、底面・上面は平滑に磨かれている。この垂飾は最初に出土したもので完形品であったが、出土後暫くして崩壊が始まり、孔の部分で縦に割れてしまった。3はやはり垂飾の完形品で、しかも出土後も状態が良好でまったく崩壊していない。形状は分銅形に近いが、張りだした部分が存在する。孔内には穿孔が両方向からなされたことを示すズレが認められる。琥珀の表面は上面・底面・側面共に良く磨かれている。3の琥珀製垂飾の資料的価値を高めているのが共伴して出土した土器片 (PL-2第9図8・9) であり、これらは同一個体で五領ケ台期に属する。4の琥珀は破片で円盤型を呈し、両面は滑らかに仕上げられているが、穿孔の痕跡は認められない。5の琥珀は穿孔の痕跡を明確に残す破片であり、孔と反対の面は平滑に磨かれている。6・7は小破片であるが、穿孔の痕跡を残している。

土坑内における琥珀の分布は、土坑の南西部分が中心で完形品は比較的高い位置に存在する。これら多数の琥珀製垂飾と破片により、本土坑の性格は墓坑とするのが妥当であろう。土坑の北



第8図 250号土坑・302号土坑（位置図1/400 平面図・断面図1/20）

側部分には土器が集中しており、南側部分と様相を異にする。これについては2基の土坑が重複している可能性もあるが、出土土器（第9図10.11.12）が8.9の土器と同じく五領ヶ台期のものであることや、北側部分から琥珀の細片が土器と共に出土していることから、1基の土坑北側部分に土器が埋められ、南側部分に琥珀の垂飾を伴う遺体が埋葬されたと見ることもできる。10



第9図 250号土坑 (2~12)・302号土坑(1)出土遺物 (1~9は1/2 10~12は1/6)

は内面の口縁部に文様帯を持ち、外面に縦方向の平行沈線を4単位持つ浅鉢ではほぼ半分が残存している。破片両端2ヶ所に補修孔が認められるものの穿孔途中でやめている。11は深鉢で、口縁部は爪形文を施す隆帯で区画され、区画内に横位細沈線と交互刺突を施す。胴部は横位細沈線と基点となる箇所に横位の突起を施し、細沈線を垂下させる。12は深鉢の底部付近の破片である。

長野県富士見市の大石遺跡1号住居址ではこの3点と同じタイプの土器が、また、11については同じ大泉村の小板遺跡で類似した土器が出土している。

302号土坑（第8・9図）南北約120cm、東西約65cm、深さ約25cmの浅い土坑である。土坑の北寄り、底面から高さ13cmの部分で琥珀製垂飾が1点出土している（PL-1第9図1）。これは250号土坑の琥珀製品と同様に、赤色を帯びた藍色を呈し、崩壊のない良質な琥珀製垂飾である。形状は丸味を持った直方体であり、表面は丁寧に磨かれている。貫通する孔に平行して、琥珀表面に穿孔の痕跡が残るが、これは穿孔に失敗したものか、あるいは琥珀の原石から垂飾1個体分を分割する際の穿孔の名残りかもしれない。共存する土器は皆無である。（五味信吾）

【琥珀製垂飾について】

甲ヶ原遺跡の琥珀製垂飾は、山梨県内出土の縄文時代の琥珀製品のものとしては一の沢遺跡・金の尾遺跡に次ぐ3例目で、質量とも第一級の資料と言える。

琥珀（amber）は、松などの樹液が化石化した脆弱な有機物で、色調は赤色、黄色、藍色を呈し、半透明である。こうした特徴は甲ヶ原遺跡の琥珀にも当てはまる。日本列島では岩手県久慈市周辺・北海道石狩地方・千葉県銚子市周辺などが主要産地として知られているが、縄文時代の琥珀出土遺跡は圧倒的にこの3ヶ所の周辺地域に多い。銚子の場合では、中生代白亜期に属する銚子層群の泥炭層から琥珀が産出する。この原産地に近い銚子市栗島台遺跡では、琥珀製大珠のほか琥珀の原石や垂飾の未製品が出土しており、琥珀の加工作業が行われた「攻玉遺跡」として注目されている。関東地方で発見された縄文時代の琥珀製品は中期に最も多い。八丈島の倉輪遺跡では前期終末から中期初頭のものと思われる琥珀製の玉が出土しており、琥珀の搬路について考える上でも興味深い。また、長野県岡谷市の梨久保遺跡でも琥珀の垂飾が土坑内から出土しているが、これも前期末から中期初頭のものとして捉えられている。

甲ヶ原遺跡250号土坑の琥珀製垂飾は五領ヶ台期に属することが明らかである。一方、302号土坑の琥珀製垂飾は共存土器がないので時期を決めることは困難であるが、250号土坑の垂飾と材質・色調・技法に共通点が見られること、全長約200mにも及ぶC区の中で、琥珀を出土した2つの土坑が9mの距離に存在することは偶然とは考え難いことから、五領ヶ台期のものとして捉えたい。両土坑の周囲には同時期の土坑がほかにも存在することから土坑集中地区と考え、これを中心に約30m北に37号住居址、約45m南に18号住居址が存在することを併せて、五領ヶ台期の集落を想定することが可能であり、興味深い。なお、甲ヶ原遺跡の琥珀は科学的分析を受けていないが、地理的見地からは千葉県銚子産の可能性が高い。（五味信吾）

引用・参考文献

- 寺村光晴・安藤文一 1973 「千葉県栗島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社
- 伊藤睦恵 1982 「千葉県栗島台遺跡発見の琥珀製大珠」『考古学雑誌』第67巻4号
- 松下亘「琥珀」1982『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 佐々木清文 1983 「琥珀の産地と流通」『上野山遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集
- 寺村光晴 1985 「琥珀の大珠—その出現と様相—」『和洋女子大学学部創設35周年記念論文集』
- 室賀照子 1985 「琥珀は語る…古代アンバーロートを探る」『末永先生米寿記念論文集』末永先生米寿記念会

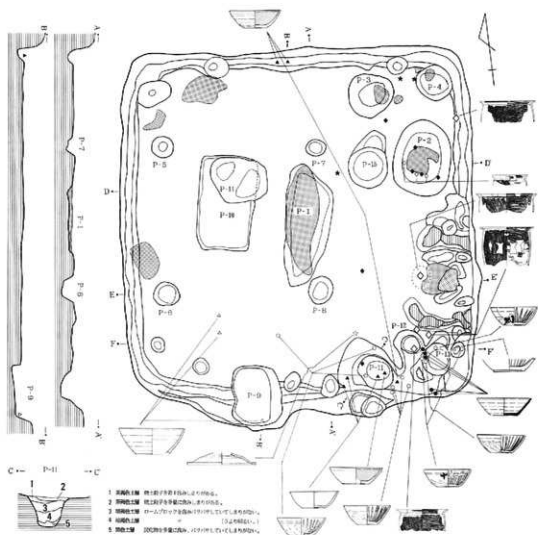
- 山梨県立考古博物館 1988 『古代の装身具』
- 藤田富士夫 1989 『玉』考古学ライブラリー52 ニューサイエンス社
- 原田昌幸 1990 「縄文時代の玉」『月刊文化財』文化庁文化財保護部
- 吉田格 1992 「縄文時代の琥珀～南関東・山梨県下の出土例について」『考古学論究』第2号 立正大学考古学会
- 千葉県文化財センター 1992 「生産遺跡の研究2-玉-」『研究紀要』13
- 山梨県教育委員会 1986 『一の沢西遺跡ほか』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書16集
- 山梨県教育委員会 1987 『金の尾遺跡ほか』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第25集
- 鏡子市教育委員会 1991 『東島台遺跡発掘調査報告書』
- 東島台遺跡発掘調査会 1990 『鏡子市東島台遺跡発掘調査報告書』
- 福田依子 1990 「草刈貝塚の小玉について」『研究連絡誌』第28号 千葉県文化財センター
- 東京都八丈町教育委員会 1987 『倉輪遺跡』
- 岡谷市教育委員会 1985 『梨久保遺跡』
- 長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-茅野市・原村その1 富士見町その2-』
- 山梨県教育委員会 1987 『小坂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第63集

6. 平安時代の住居址と遺物

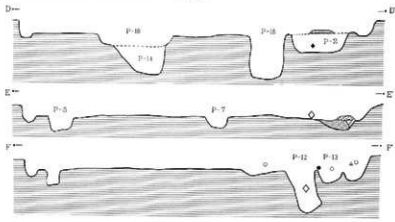
今年度の調査で発見された平安時代の住居址は39号住居址の1軒のみであり、過去4年の調査を総計しても2軒に過ぎない。

39号住居址(第10・11図)1辺約5.5mの正方形を呈する大型の住居址で、方位はほぼ磁北に合致する。覆土は黒褐色土で、縄文時代の住居址の覆土とは明らかに異なる。床面は確認面より約30cmの深さであり、住居址の各辺には床面から10cm程度掘り込んだ幅約20～30cmの周溝が存在する。カマドは住居址の東辺中央よりやや南寄りに存在し、規模は左右の幅約150cm、奥行き約110cmである。袖の部分には粘土塊が残存していたものの、煙道の痕跡・袖石などは認められなかった。カマドの中央部分には灰が塊の状態で認められ、その周囲には焼土や床面が炭によって赤焼けした痕跡が残る。一方、住居址の中央にも南北180cm、東西60cmの浅い掘り込み内(P-1)に焼土が存在するほか、これ以外にも住居址の北辺・西辺の周溝付近、北東隅のピット内(P-2, 3, 4)に焼土の痕跡が残る。柱穴については、住居址の西辺と中央付近に南北に並ぶ4ヶ所のピットがほぼ等間隔(約240cm)に位置し、これに該当すると考えられる(P-5, 6, 7, 8)。こうした住居址のカマドと反対側に4ヶ所の柱穴が偏る例は長野県松本市周辺でも確認され、B2類として位置づけられている。住居址の南壁と4ヶ所の柱穴の中央には住居址と方位を同じくする長方形の浅い落ち込み(P-9, 10)が存在し、住居に付属した施設と考えられる。住居址の東南隅には、深さ40～60cmのピットが2基(P-11, 12)存在するが、このうちP-11は底面に黒色の炭が約15cm堆積しており、カマドに伴う炭の貯蔵穴の可能性がある。

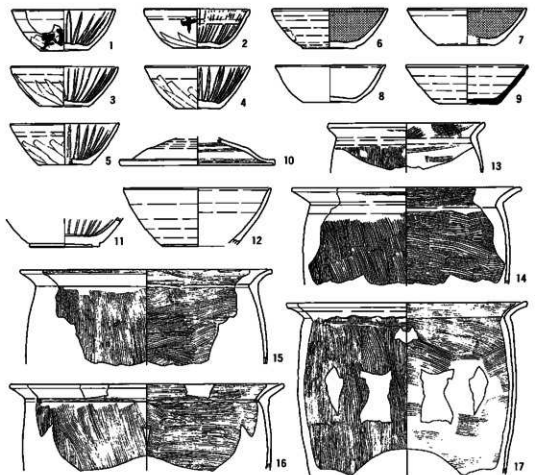
39号住居址の出土遺物(第11図)は、須恵器(坏・甕)、土師器(坏・高台坏・蓋・甕・皿)、灰釉陶器である。1～5の土師器坏はいわゆる「甲斐型坏」であり、内面体部に放射状暗文と外面体部下半に斜方向のヘラ削りが施されている。口径11.0cm前後、底径4.8～5.4cmで、底径が口



- 凡 例
- 土器器杯
 - △ 土器器高台杯
 - ◇ 土器器腰
 - ☆ 土器器蓋
 - ▲ 土器器内黒杯
 - 須恵器器杯
 - ◆ 須恵器器腰
 - ★ 灰釉陶器
 - 焼 土
 - 灰
 - ▨ 粘土塊



0 2m



第11図 39号住居址出土遺物 (1/4)

0 10 cm

径の半分より小さくなる。底部の調整は回転糸切り後、部分的にヘラ削りを施している。6～8は長野県地方に多く見られる「内黒環」であるが、8は内面が赤褐色に変色しており、2次焼成を受けた可能性がある。口径11.6～12.5cm、底径5.6～6.0cmである。9は須恵器環で、口径12.6cm、底径6.0cmである。10は土師器の蓋で、内面体部にラセン状の暗文を有し、口径16.0cmである。11・12は土師器の高台杯であるが、11が厚手で内面体部に放射状暗文を有するのに対して、12は薄手で暗文も見られない。なお、12のタイプの高台杯と10のタイプの蓋はセット関係になる可能性がある。13～17は土師器甕で、内面の口縁部から胴部にかけて横方向のハケメ、外面の頸部から胴部にかけて縦方向のハケメを有す。しかし、15～17が金雲母などを多く含むいわゆる「甲斐型甕」であるのに対し、13・14は胎土が非常に緻密で、不純物をあまり含まない点で大きく異なる。このうち、13は口径16.5cmの小型、14は口径24.0cmの大型の甕で、大小2つのタイプが存在する。15～17も大型で口径は25.0～28.8cmである。13の小型甕は口縁が短く内湾するのに対して、他の大型の甕は口縁が薄手で長いという特徴を持ついわゆる「薄口縁型」である。

1～5の坏は「甲斐型土器編年」の第Ⅲ期に該当し、大型甕が「薄口縁型」と呼ばれるタイプであることや灰釉陶器の存在もこれに符合する。「甲斐型土器編年」の実年代については、周辺県の編年との間に数十年の隔りが存在することから再検討され、第Ⅲ期はこれまでの10世紀初頭から9世紀の中頃に早まる案が提起されている。この編年案に従うと、八ヶ岳南麓地域においては「甲斐型土器編年」の第Ⅳ期（9世紀前半）に突然大規模な集落が発生し、第Ⅴ期（10世紀前半）に最盛期を迎え、第Ⅵ期（10世紀後半）以降急激に衰退していくという様相がみられる。39号住居址は第Ⅲ期に属し、この地域の平安時代の住居としては比較的早い時期のものである。

墨書土器については、文字の判読可能な2点（1は「判」、2は「十」）と判読の困難な数点が出土している。文字は、1が外面の体部下半、2が外面の口縁近くに正位で書かれている。本遺跡の西1kmに所在する寺所遺跡では39号住居址より新しい第Ⅶ～Ⅷ期を中心とした31軒の住居址から400点余りの墨書土器が出土しており、その大半は「修」という文字が書かれている点、最も規模の大きい13号住居址からは200点もの墨書土器が出土している点で注目されている。39号住居址の墨書土器は寺所遺跡のような新しい時期の墨書土器と比較して、文字が比較的小さく丁寧に書かれているが、これは長野県内でも一般的に見られる特徴である。

39号住居址における遺物の出土状態は第10図のようであり、甕類が主にピット内とカマド周辺から検出されているのに対して、坏類は住居址の東南隅すなわちカマドの南に分布している。この付近のピットは何らかの理由で埋め固められた痕跡があり、坏はその上に正位しかも近接して並んだ状態で検出され（第10図P-13、第11図1、2、3、9）、どれも部分的に欠損しており完全なものはない。こうした出土状態は住居使用時の産物というよりも、廃絶に際しての意図的な行為に起因する可能性がある。さらに、土器の分布と先に述べた柱穴とカマドの関係と併せて、この住居を4本柱によって形成された西半分の「居間の空間」とカマドを中心とした東半分の「厨房の空間」に大きく分けることができる。

（五味信吾）

引用・参考文献

- 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野緑地蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1— 総論編』
坂本美夫・末木健・堀内真 1983 「甲斐地域」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古学会
坂本美夫 1989 「甲斐型土器編年について(1)」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会
山梨県考古学協会 1992 「甲斐国における平安時代研究の現状と課題」『山梨県考古学協会誌』第5号
山梨県考古学協会 1992 『甲斐型土器—その編年と年代—』甲斐型土器研究グループ第1回研究会資料
金原正 1991 「長野県内の古代集落遺跡と墨書土器」『信濃』43巻第4号
平川南 1991 「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民族博物館研究報告』第35集

調 査 組 織

調 査 主 体	山梨県教育委員会
調 査 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
調 査 担 当 者	山本茂樹（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 五味信吾（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
作業員・整理員	千野三男、千野松代、千野あやめ、千野町子、浅川たみ子、浅川八千子、浅川茂子、浅川三千代、浅川保代、浅川千代子、藤森房子、八巻久子、平嶋弘子、井富保仁、小宮山きよ、浅川房子、浅川久代、浅川ちず子、藤森八千代、藤森かねよ、藤森秀子、藤森佐喜子、藤森ます子、藤森里美、藤森さち子、斉藤かずみ、相吉よしえ、千野金子、山口淑江、関間俊明、石原はつ子、長田てる美、長田久江、塩島富美子、内藤安雄、越石力、大村昭三、菱山喜美子、長谷川巖、飯寄貞子、出月遊亀子、長田可祝、出月満寿江、中込よしミ
協 力 者・機 関	大泉村教育委員会、帝京大学山梨文化財研究所

報 告 書 概 要

フ リ ガ ナ	カブツツバライセキガイホウⅡ	
書 名	甲ッ原遺跡概報Ⅱ（第4次調査）	
副 題	一般県道須玉八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査	
シ リ ー ズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集	
著 者 名	山本茂樹・五味信吾	
発 行 者	山梨県教育委員会 山梨県土木部	
編 集 機 関	山梨県埋蔵文化財センター	
住 所・電 話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881	
印 刷 所	朝日新聞社	
印刷日・発行日	平成5年3月20日・平成5年3月30日	
エプソンの 甲ッ原遺跡	所 在 地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出
	25000分の1地図名・位置・標高	谷戸 北緯35°51' 東経138°24' 標高780m
概 要	主 な 時 代	縄文時代前・中期、平安時代
	主 な 遺 構	縄文時代前・中期の住居址27軒（膳殿期6軒・五ヶヶ台期2軒・落沢期3軒・藤内期5軒・井戸尻期5軒・曾利期3軒等）および土坑140基、平安時代の住居址1軒
	主 な 遺 物	縄文時代前・中期の土器、石器（打製石斧・磨製石斧・石鏃・石匙・石皿・石鏃・磨石等）、土偶、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器
	特 殊 遺 構	
	特 殊 遺 物	琥珀製垂飾、特殊脚付鉢（赤色・黒色塗彩有り）
	調 査 期 間	1992年4月20日～10月31日



山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集

1993年3月20日 印刷

1993年3月30日 発行

甲ッ原遺跡概報Ⅱ

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会

山梨県土木部

印刷 株式会社 少國民社